

2014

平成26年度 独立行政法人

国立文化財機構 概要

目 次

ごあいさつ	
I 国立文化財機構のあらまし	2
II 国立文化財機構の事業	5
1 収蔵品の整備と、次代への継承	5
■ 収集	
■ 保存・修理	
2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	5
■ 展示・公開	
■ 博物館来館者数	
■ 教育活動	
3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の 活性化に寄与	6
4 我が国の文化財に関する中核的研究機関としての調査 及び研究の推進	6
5 文化財保護に関する国際協力の推進	7
6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信	7
7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上	7
■ 大学との連携	
III 各施設の活動	8
東京国立博物館	8
京都国立博物館	10
奈良国立博物館	12
九州国立博物館	14
東京文化財研究所	16
奈良文化財研究所	18
アジア太平洋無形文化遺産研究センター	20
IV 資料	22
役員等一覧	
役員／運営委員会／外部評価委員会	
職員数	
組織図	
予算	
外部資金受入	
国立文化財機構からのお知らせ	24
寄附・寄贈	
会員制度	
ユニークベニュー	

ごあいさつ

佐々木 丞平

独立行政法人国立文化財機構理事長



国立文化財機構は4つの国立博物館、2つの文化財研究所、そして2011年に設立されたアジア太平洋無形文化遺産研究センターの7つの施設で構成されていますが、この冊子はこれら7施設の概要並びに活動状況をご紹介します。

7つの施設は日本の各地に分散して設置されていますが、各施設はそれぞれに特色を持ち、その設立された地域を背景に活動をおこなっております。東京国立博物館は首都圏にある国を代表する総合博物館として、日本の文化を世界に発信する重要な役割を担っています。京都国立博物館は、平安時代以降幕末に到るまで、皇都としての1200年が形作る京都文化の歴史を浮き彫りにする博物館として、奈良国立博物館は仏教文化を語るに欠かせない博物館として、そして九州国立博物館はアジア諸地域との文化交流という地域の持つ特性に視点を置いた博物館として活動しております。さらに東京文化財研究所は文化財に関する基礎的な又最先端の科学的成果を応用した調査研究を世界に発信し、奈良文化財研究所は日本の古代社会を総合的に調査研究するための基地であり、そしてアジア太平洋無形文化遺産研究センターはアジア太平洋の諸地域に存在する無形文化遺産の保護のため、世界と協同して調査研究する機関です。

これら各施設はそれぞれに担うべき大きな役目を持っていますが、その総てに共通しているのは、文化財を守り、それを多くの人々にできる限りよい状態で、かつよい環境で見えていただき、日本の伝統文化への理解を深めて頂く手助けをしようという点です。その意味で私共は国の文化財保護行政の基盤を支えるという大きな役割を担っています。

昨年、平成25年は私ども国立文化財機構にとりまして今後の行方を大きく左右する議論が展開された年でした。平成24年1月に閣議決定がなされた3法人（国立文化財機構、国立美術館、日本芸術文化振興会）の統合が同12月の政権交代を機に凍結され、昨年一年をかけて独立行政法人の組織の見直しについて改めて議論がなされてきました。

3法人はいずれも文化行政の基盤を支える組織ではありますが、その対象も業務の手法も大きく異なるものであり、統合効果はほとんど期待できないこと、そして統合を考えるよりも、現行の独立行政法人通則法やその運用についてを見直すことが出来れば、今の法人でも十分にやっていけることを主張してきました。こうした主張に加え、「使命と役割の異なる組織の統合は好ましくない。むしろ、それぞれの組織を拡充し、本来果たすべきナショナルセンターとしての機能を十分に発揮できるようにすべきである。また、もはや統合による合理化の余地が無い」等の声が様々なところから上がり、結果として平成25年12月末の閣議で統合は見送られることが決定されました。

今回の議論で私どもが最も主張したかったのは、毎年運営費交付金が削減され、かつ自己収入目標額が上昇していくという、機構としては大変苦しい運営状況を強いられている上に、自己収入目標額を超える収入があってもほとんどそれが使えないという状況が続いており、これらの点の改善でした。今回の見直しによって、取り敢えず平成26年度はそれらが緩和され、自己収入目標額も前年度と同額の据え置きとなっております。そして利益の処分にあたっても、これまでほとんど経営努力が認定されず国庫に納付されていましたが、その認定基準要件が幾分改善され、収入目標を超えたものを新規の利益と認められるようにするという方針が示されております。

今回、平成25年12月24日に閣議決定された「独立行政法人改革等に関する基本的な方針」の中でも繰り返し述べられているように、いかなる場合においても、運営費交付金が国民から納められた税金を財源にしていることを踏まえて、国民の目線に立ってサービス等の業務の質の向上を図るということを常に心がけていきたいと思っております。

現実には厳しい国家財政の中での活動ではありますが、文化財を守る、そしてそれを多くの人々に鑑賞頂き、知って頂くということが、現代の日本文化を生きることと深く関わり、重要な意味を持っていることを十分理解して頂けるよう、伝統文化に携わる側から発信していかなければならないわけで、それは私たちの責任であるだろうと思っています。

これからも私共の果たすべき役割を充分認識し、仕事に邁進していく所存でありますので、何卒よろしくご支援を賜りますようお願い申し上げます。

国立文化財機構のあらまし

独立行政法人国立文化財機構は、ともに文化財の保存及び活用という同一の目的を有する独立行政法人国立博物館（東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）と、独立行政法人文化財研究所（東京文化財研究所、奈良文化財研究所）の二つの法人の統合により、平成19年4月に発足いたしました。

統一的なマネジメントの下で、貴重な国民的財産である文化財の保存・活用を一層効果的かつ効率的に推進するため、各施設はそれぞれ次のような役割を果たしています。

東京国立博物館

我が国の人文系の総合的な博物館として、日本を中心として広くアジア諸地域にわたる文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

京都国立博物館

京都に都が置かれた平安時代から江戸時代の京都文化を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

奈良国立博物館

仏教美術及び奈良を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

九州国立博物館

日本とアジア諸地域との文化交流を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。

東京文化財研究所

我が国の文化財の研究を、基礎的なものから先端的・実践的なものまで多様な手法により行い、成果を積極的に公表・活用するとともに、世界の文化財保護に関する国際的な研究交流等を実施する国際協力の拠点としての役割を担っています。

奈良文化財研究所

平城宮跡に隣接し、遺跡・建造物・庭園等の土地に結びついた文化財及び南都諸大寺及び近畿周辺を中心とした古社寺等における文化財の保存・活用を図るために発掘・調査・研究を行うとともに、全国各地の発掘調査等に対する協力・助言等を行っています。

アジア太平洋無形文化遺産研究センター

アジア太平洋地域における危機に瀕した無形文化遺産保護のための調査活動や、無形文化遺産保護の国際的動向に関する情報収集と配信を行っています。



東京国立博物館



〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9
TEL: 03-3822-1111 (代表)
<http://www.tnm.jp/>

周辺地図



JR上野駅公園口、または鶯谷駅下車 徒歩10分
東京メトロ 銀座線・日比谷線上野駅、千代田線根津駅下車徒歩15分
京成電鉄 京成上野駅下車 徒歩15分

利用案内

開館時間／9：30～17：00（入館は閉館の30分前まで）
平成26年3月～の特別展開催期間中の金曜日は20：00まで
平成26年3月～12月7日の土日祝休日は18：00まで
休館日／月曜日（祝日・休日にあたる場合は開館し、翌日休館）
年末年始（12月24日～1月1日）
※特別展等の開催や節電対応に伴い、休館日および開館時間は変更になることがあります

観覧料／一般 620 (520) 円 大学生 410 (310) 円

※()内は20名以上の団体料金

※特別展は別料金

※障がい者とその介護者1名は無料

※満70歳以上、高校生以下・満18歳未満は総合文化展について無料

※国際博物館の日（5月18日）。ただし月曜日にあたる場合は翌日、敬老の日、留学生の日は、総合文化展について無料

京都国立博物館



〒605-0931
京都府京都市東山区茶屋町527
TEL：075-541-1151
<http://www.kyohaku.go.jp/>

利用案内

平常展示館「平成知新館」は、平成26年9月13日にグランドオープンします。
開館時間／9：30～17：00（入館は開館の30分前まで）
（特別展覧会開催期間中は18：00まで、金曜日は20：00まで）
休 館 日／月曜日（月曜日が祝日・休日にあたる場合は開館し、翌日休館）、
年末年始
観 覧 料／一般 520（410）円 大学生 260（210）円
※（ ）内は20名以上の団体料金 ※高校生以下は無料
※特別展覧会により異なる
※自主展の場合、障がい者とその介護者1名は無料
共催展の場合、共催者と協議の上、同様とする

周辺地図



JR・近鉄京都駅下車、駅南バスD1のりばから100号、D2のりばから206・208号系統にて博物館・三十三間堂前下車、徒歩1分
京阪電車 七条駅下車、東へ徒歩7分
阪急電車 河原町駅下車、京阪電車祇園四条駅から大阪方面行きにて七条駅下車、東へ徒歩7分
又は、河原町駅下車、四条河原町からバス207号系統にて東山七条下車、徒歩3分
※駐車場は有料となっております。ご来館はなるべく公共交通機関をご利用ください。

奈良国立博物館

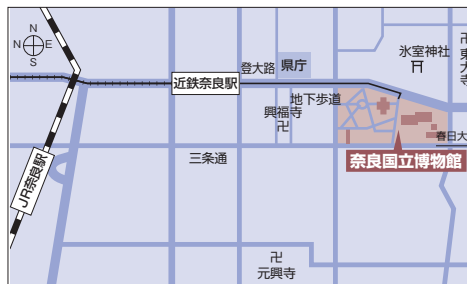


〒630-8213 奈良県奈良市登大路町50
TEL：0742-22-7771
<http://www.narahaku.go.jp/>

利用案内

なら仙像館は平成26年9月8日から当分の間休館します。
開館時間／9：30～17：00（入館は閉館の30分前まで）
※正倉院展期間中は、9：00～18：00、
7月19日～9月15日及び3月1日～14日は、9：30～18：00
まで開館
※4月最終から10月最終までの毎金曜日、正倉院展期間中の毎金・
土・日曜日及び祝日、8月5日～8月14日、12月17日、1月第
4土曜日、2月3日、3月12日は19：00まで開館
休 館 日／月曜日（祝日・休日にあたる場合は開館し、翌日休館）、1月1日

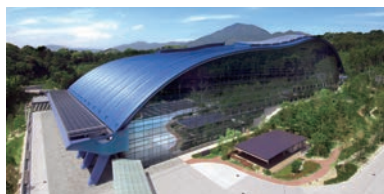
周辺地図



近鉄奈良駅下車 登大路を東へ徒歩15分
JR奈良駅または近鉄奈良駅から市内循環バス「氷室神社・
国立博物館」下車すぐ

観覧料／一般 520（410）円 大学生260（210）円
※（ ）内は20名以上の団体料金
※特別展は別料金
※障がい者とその介護者1名は無料
※満70歳以上、高校生以下・18歳未満は名品展について無料
※こどもの日、国際博物館の日（5月18日）。ただし月曜日にあたる場合は翌日、敬老の日、関西文化の日、おん祭お渡り式の日、節分は名品展について無料

九州国立博物館



〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-2
TEL：092-918-2807（代表）
<http://www.kyuhaku.jp/>

利用案内

開館時間／午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日／月曜日（月曜日が祝日・休日の場合は開館、翌日休館）、年末
文化交流展（平常展）観覧料／一般：430円（220円）／大学生130円（70円）
※（ ）内は団体料金（有料の方が20名以上の場合）
※特別展は別料金
※障害者手帳等をご持参の方とその介護者1名は無料
※満70歳以上、高校生以下・18歳未満は文化交流展（平常展）について無料
※国際博物館の日（5月18日）。ただし休館日にあたる場合は翌日
および敬老の日は、文化交流展（平常展）について無料。

周辺地図



鉄 道 西鉄電車：西鉄福岡（天神）駅から西鉄天神大牟田線（特急約13分/急行約17分）で西鉄二日市駅乗り換え、西鉄太宰府線（約5分）で西鉄太宰府駅下車、徒歩約10分。
※特急/急行料金不要
JR：JR博多駅からJR鹿児島本線（快速約15分）でJR二日市駅下車、JR二日市駅から西鉄二日市駅（徒歩約12分、バス約5分）、西鉄二日市駅から西鉄太宰府線利用。
自動車 九州自動車道：太宰府ICまたは筑紫野ICから高雄交差点経由で約20分。
福岡都市高速：水城出口から高雄交差点経由で約20分。
JR二日市駅から約15分・福岡空港から約30分。
タクシー 博多バスターミナル（1階13番のりば太宰府行き）から西鉄太宰府駅下車（所要時間約42分）、徒歩約10分。

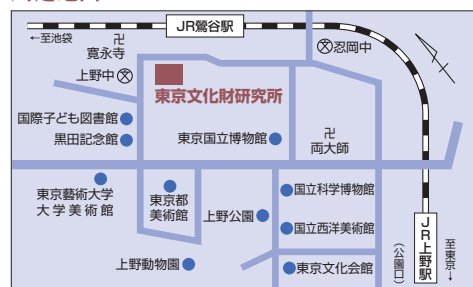


東京文化財研究所



〒110-8713
東京都台東区上野公園13-43
TEL : 03-3823-2241 (代表)
<http://www.tobunken.go.jp/>

周辺地図



JR鶯谷駅南口下車 徒歩10分
JR上野駅公園口下車 徒歩15分
東京メトロ 銀座線・日比谷線上野駅下車 徒歩15分、千代田線根津駅下車 徒歩15分
京成電鉄 京成上野駅下車 徒歩20分



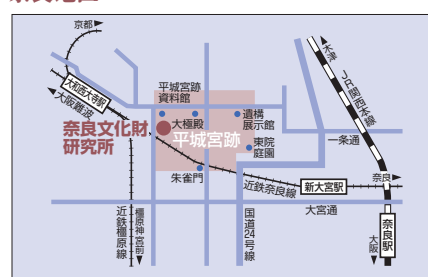
奈良文化財研究所



〒630-8577 奈良県奈良市佐紀町247-1
TEL : 0742-30-6733 (代表)
<http://www.nabunken.go.jp/>

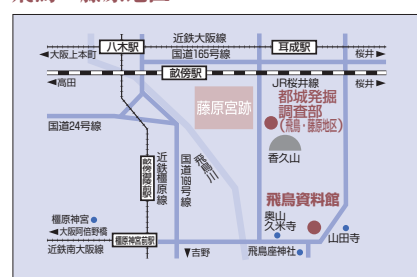
周辺地図

奈良地区



●鉄道利用の場合
奈良文化財研究所・平城宮跡資料館
近鉄大和北大寺駅北口より徒歩10分
●バス利用の場合
JR・近鉄奈良駅より奈良交通バス
奈良文化財研究所・平城宮跡資料館「二条町」下車

飛鳥・藤原地区



都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区)
近鉄大和八木駅よりタクシーで20分
近鉄橿原神宮前駅よりタクシーで20分
近鉄橿原神宮前駅・飛鳥駅より明日香周遊バス(かめバス)「飛鳥資料館」下車
JR・近鉄桜井駅より奈良交通バスで「飛鳥資料館」下車

利用案内

- 平城宮跡資料館
開館時間／9:00～16:30 (入館は16:00まで) (無料)
休館日／月曜日(祝日・休日の際は開館し、翌平日休館)、年末年始
お知らせ／ボランティアによる解説を行っています。(無料)
お問合せ／奈良文化財研究所研究支援推進部連携推進課：0742-30-6735
- 藤原宮跡資料室
開館時間／9:00～16:30 (無料)
休館日／年末年始および展示替え期間中
お問合せ／奈良文化財研究所都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区)：0744-24-1122

- 飛鳥資料館
開館時間／9:00～16:30 (入館は16:00まで)
休館日／月曜日(祝日・休日の際は開館し、翌平日休館)、年末年始
入場料金／一般 270 (170) 円
大学生 130 (60) 円
※()内は20名以上の団体料金
※特別展は別料金
※障がい者とその介護者1名は無料
※高校生および18歳未満、65歳以上は無料
お知らせ／解説を行っています。(事前申込制、無料)
お問合せ／飛鳥資料館：0744-54-3561

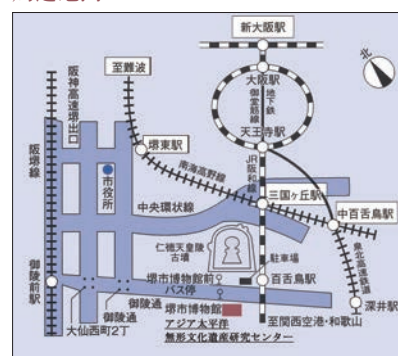


アジア太平洋無形文化遺産研究センター(IRCI)



〒590-0802 大阪府堺市堺区百舌鳥夕雲町2丁 (堺市博物館内)
TEL : 072-275-8050 (代表)
<http://www.irci.jp>

周辺地図



●JR西日本阪和線・関西空港線「百舌鳥」駅下車徒歩6分
南海バス「堺市博物館前」下車徒歩4分

国立文化財機構は、次のような事業を展開しています。

1 収蔵品の整備と、次代への継承

歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点として、体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、各国立博物館はその収集方針に沿って適時適切な収集に努めています。

寄贈品や寄託品の受入れについても、文化庁とも連携し、登録美術品制度の活用や相続税の猶予措置などといった税制面での環境整備を進めるなど、積極的に取り組んでいます。

また、国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えていくため、文化財の保存環境を整備するとともに、修理・保存処理を必要とする収蔵品については、保存科学・修復技術の担当者が連携し、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を取り入れ、緊急性の高い収蔵品から順次計画的に修理を行っています。

■収集

体系的・通史的にバランスの取れた収蔵品の蓄積を図るため、また、有形文化財の散逸や海外流失を防ぐため、有形文化財の収集（購入・寄贈・寄託）に不断的な努力を続けています。

また、4博物館それぞれの特色を生かし平常展をさらに充実させるため、社寺や個人が所有する文化財の寄託を受け入れています。

■保存・修理

有形文化財はおおよそ100年に1回の本格修理を重ね、今日まで伝世しています。機構では日常的な展示・保管のための緊急修理や、収蔵品の損傷の進行状況に合わせた計画的な本格修理を実施しています。

収蔵品

(件)

合 計			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文
124,729	130	952	115,653	87	633	6,721	27	179	1,862	13	111	493	3	29

(平成26年3月31日現在)

寄託品

(件)

合 計			東京国立博物館			京都国立博物館			奈良国立博物館			九州国立博物館		
総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文	総数	国宝	重文
11,486	193	1,191	2,519	53	245	5,892	87	622	1,994	53	321	1,081	0	3

(平成26年3月31日現在)

2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

常にお客様のニーズ、最新の学術的動向などを踏まえた質の高い展示、魅力ある展覧会を開催することにより、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化についての理解が深められるよう、国内外への情報発信に努めています。

また、お客様に親しまれる施設を目指し、施設のバリアフリー化、各種案内の充実などお客様の立場に立った、より良い観覧環境の整備と管理運営に努めています。

■展示・公開

国宝・重要文化財をはじめとする古美術品や考古資料等の文化財に接し、美や感動を味わっていただくため、各国立博物館の特色を十分に発揮した平常展・特別展等を開催しています。また、海外の博物館・美術館とも協力・連携して、相互に文化を紹介する展覧会を開催しています。

■博物館来館者数（平成25年度）

合 計	東京国立博物館	京都国立博物館	奈良国立博物館	九州国立博物館
2,660,010人	1,322,288人	148,429人	461,690人	727,603人



狩野山楽山雪展
(京都国立博物館)
平成25年3月30日～5月12日



文化庁主催海外展「日本文化展」
(ベトナム国立歴史博物館)
平成26年1月16日～3月9日

■教育活動

日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化についての理解促進を図るため、学校や社会教育団体などと連携協力しながら、講演会、ワークショップ等の学習機会を提供しています。また、教育活動のさらなる充実を図るためのボランティア活動の支援や、大学との連携事業などによる人材育成などの事業も行っています。

3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与

我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、次のような活動を行っています。



第4回アジア国立博物館長会議 (ANMA)
平成25年10月8日

- ① 博物館の収蔵品等に関する調査研究の成果などを出版物のWebサイトの活用など様々な方法で広く公開しています。
- ② 海外の優れた研究者を招いた国際シンポジウムを開催するとともに職員を海外の研究機関や国際会議に派遣しています。
- ③ 博物館関係者、修理技術者等を対象とした研修プログラムを関係機関と連携しながら実施し、国内外の文化財修理・保存処理の充実にも寄与しています。
- ④ 収蔵品を日本各地でご覧いただけるよう保存状態を勘案しつつ、公私立の博物館等へ積極的に貸与するとともに、公私立博物館等への指導・助言を行い、情報交換・人的ネットワークの形成に努めています。

4 我が国の文化財に関する中核的研究機関としての調査及び研究の推進

各種の文化財に関する調査研究を推進するとともに、貴重な文化財を確実に保存し、次代へと適切に継承していくために必要な知識・技術の基盤形成に取り組んでいます。



正月の春祈禱に集落跡で演じられる獅子舞(女川町竹浦)



研究成果を活かし再構成されるキトラ古墳壁画「天文図」



高松塚古墳壁画の蛍光X線分析

- ① 我が国の有形文化財・記念物・文化的景観・伝統的建造物群及び関連する諸外国の文化財についての研究、無形文化遺産の伝承・公開の基盤形成に関する研究、平城宮跡や飛鳥・藤原宮跡の発掘調査等に基づく古代日本の都城の解明を目指した研究者等、文化財の各分野に関する基礎的・体系的な調査研究を実施しています。これらを通じて総合的な視点に基づく文化財の調査研究手法の開発等を推進し国や地方公共団体における文化財保護施策の企画立案及び文化財の評価等に関する業務の基盤形成に寄与しています。

- ② 文化財の記録や解析のためのデジタル画像形成手法や、遺跡の調査手法、年輪年代の調査手法などに関する研究・開発を推進し、文化財を生み出した文化的、自然的環境等の背景やその変化の過程の解明に資する基礎的資料の充実ならびに提供に寄与しています。
- ③ 最新の科学技術を活用した保存科学に関する先端的な調査研究や伝統的な修復技術、製作技法、利用技法に関する調査研究に取り組むことにより、文化財の保存・修復の質的向上に寄与しています。
- ④ 高松塚古墳やキトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要でありかつ緊急に保存及び修復の措置等をとる必要のある文化財について、国や地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的調査研究を迅速かつ適切に実施しています。
- ⑤ 有形文化財の収集・保存・管理・展示・教育活動等に関する調査研究を計画的に実施し、その保存と活用を推進することにより、次世代への継承及び我が国文化の向上に寄与しています。

5 文化財保護に関する国際協力の推進

人類共通の遺産である文化財の保護のためには国際協力が不可欠です。そこで、国内の研究機関間の連携強化や諸外国との国際共同研究の実施、研修や専門家の派遣を通じた文化財の保存・修復に関する人材育成や技術移転などの事業を展開し、我が国の国際貢献に寄与しています。

また、平成23年10月にアジア太平洋無形文化遺産研究センターを設置し、アジア太平洋地域における危機に瀕した無形文化遺産保護のための活動や、研究推進活動を行うとともに無形文化遺産保護の国際的動向に関する情報収集を図っています。



フルブック遺跡での遺構測量実習（タジキスタン）

6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信

文化財に関する資料の収集・整理・保管を行うとともに、情報や調査研究成果を広く外部に公開・提供するために、文化財に関する資料の電子化の推進及び専門的アーカイブの拡充、公開講演会や国際シンポジウムの開催、各施設ウェブサイトの充実などに取り組んでいます。また、奈良文化財研究所の平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館においては、調査研究成果に関する展示を充実させ、広く一般の方に理解を深めていただけるよう努めています。



スタンレー・アベ氏（米・デューク大学教授）講演会の様子

7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

国や地方公共団体等に対し、調査研究成果に基づく専門的・技術的な協力・助言を行うとともに、文化財に関する情報、知見、技術を公開・活用することにより、全国の文化財保護関係者の知識・技術の向上に寄与しています。また専門職員を対象とした研修等や大学との連携を行うことにより、文化財保護に携わる人材の質的向上と人材育成を図っています。



報告書作成課程講義

■大学との連携

- 東京藝術大学：システム保存学（保存環境学、修復材料学）
- 京都大学大学院人間・環境学研究科：共生文明学専攻（文化・地域環境論講座：文化遺産学分野）
- 奈良女子大学大学院人間文化研究科：比較文化学専攻（文化史論講座）
- 神戸大学大学院人文学研究科（連携講座 文化資源論）



東京国立博物館

我が国の人文系の総合的な博物館として、日本を中心として広くアジア諸地域にわたる文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。



東京国立博物館長
銭谷 眞史

東京国立博物館は、明治5年(1872)に創立された、日本でもっとも長い歴史を持つ博物館です。数多くの国宝、重要文化財をはじめ、11万4千件にのぼる収蔵品を所蔵し、日本を中心に広くアジア諸地域にわたる有形文化財の収集、保管、修復、展示、調査研究、教育普及などの事業を行っています。

トーハク(東京国立博物館の愛称)では、平成26年4月に、正門周辺の再開発を進め、総合案内所、チケット売り場、ミュージアムショップや託児室を併設した「正門プラザ」がオープンし、お客様のトーハクへの第一歩を演出する新しい顔ができました。

総合文化展では、本館15室から19室に高透過・低反射のガラスケースを導入し、明るく、より見やすくするなど展示環境の改善を図るとともに、博物館ガイドアプリ『トーハクナビ』で見学コースを紹介するなど、来館者の鑑賞をサポートする取り組みを進めています。

また、展示だけでなく、製作体験などを通して文化財に親しみ理解を深めながら鑑賞をサポートするスクールプログラム、ガイドツアーやワークショップなど様々なプログラムを多数ご用意しています。

平成26年度の特別展は、「宋西と建仁寺」にはじまり、「キトラ古墳壁画」、「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」、「日本国宝展」、「みちのくの仏像」と日中韓の国立博物館による初めての合同企画展として、「東アジアの華 陶磁名品展」を開催いたします。

これからもトーハクは、子どもから大人まで、そして当館を訪れる世界中の人々にご満足いただける博物館づくりに力を入れてまいります。皆様のご来館を心からお待ちしております。

■展示・公開

●総合文化展

総合文化展は、当館の収蔵品、寄託品を展示するもので、当館の展示事業の中核を成すものです。年間300回程度の展示替を定期的に実施し、平成26年度は約7,500件の文化財を展示・公開する予定です。

各展示館ごとの特色は次のようになっています。

本館：「日本美術の流れ」と題した縄文時代から江戸時代までの時代別展示(2階)と、彫刻や陶磁などの分野別展示(1階)、企画展示で構成しています。

東洋館：「東洋美術をめぐる旅」をテーマに、日本以外の東洋の美術品・考古資料を展示しています。

平成館：考古展示室(1階)は、銅鐸・埴輪をはじめとする旧石器時代から江戸時代までの考古遺物を展示し、企画展示室(1階)では特集や教育普及事業に関連した展示などを行っています。平成26年12月から27年3月までリニューアル工事のため閉館します。

法隆寺宝物館：奈良の法隆寺から皇室に献納された宝物300件余りを収蔵・展示しています。

表慶館：近年は特別展の展示会場として活用してきました。平成24年1月以降、基本的に休館しています。

黒田記念館：日本近代画家の黒田清輝を記念した建物です。平成24年4月以降、耐震改修のため休館していますが、平成27年1月にリニューアルオープンする予定で、黒田清輝の作品を展示・公開します。

●特集

総合文化展の一部として、特にテーマ性、企画性の高い内容で構成する特集を行っています。

- ・伊能忠敬の日本図 平成26年6月24日～8月17日
- ・春日権現験記絵模本Ⅰ—美しき春日野の風景— 平成26年7月23日～8月31日
- ・趙之謙の書画と北魏の書 平成26年7月29日～9月28日



本館18室



開山・宋西禅師800年遠忌
特別展「宋西と建仁寺」
(平成26年3月25日～5月18日)



屏風の本格修理を行う専門職員

●特別展

研究成果の公開の場として、またお客様の要望に応える場として、特別展を開催しています。以下は平成26年度に開催する展覧会です。

- ・開山・栄西禅師800年遠忌 特別展「栄西と建仁寺」(平成26年3月25日～5月18日)
- ・特別展「キトラ古墳壁画」(平成26年4月22日～5月18日)
- ・特別展「台北 国立故宫博物院－神品至宝－」(平成26年6月24日～9月15日)
- ・2014年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」(平成26年9月20日～11月24日)
- ・日本国宝展 (平成26年10月15日～12月7日)
- ・被災文化財巡回展 (仮称) (平成27年1月14日～3月15日予定)
- ・特別展「みちのくの仏像」(平成27年1月14日～4月5日)

●海外展

- ・海外展「伝統の再創造：日本の近代美術」(平成26年2月16日～5月11日) 会場：クリーブランド美術館 (アメリカ) (共催：東京国立博物館)
- ・海外展「狩野派」展 会場：フィラデルフィア美術館 (アメリカ) (平成27年2月12日～5月10日予定)

■文化財の収集・保管・修理

日本を中心とするアジア諸地域の文化の体系的な陳列を目指し、購入・寄贈・寄託によって、文化財の収集に努めています。年月を経て劣化した文化財を将来にわたって安全に公開できるように、展示室や収蔵庫の環境改善、展示・輸送方法の改良、文化財の状態診断年間約100件の本格修理や年間約1,000件の対症修理を実践しています。こうした取り組みを臨床保存と呼んでいます。

■教育普及

我が国の博物館における中核としてふさわしい教育活動を目指しています。先導的な事業のモデル化を図り、学校等との連携やボランティア活動を支援するなど、様々な教育機会の提供に努めています。

- 学校との連携
 - ・スクールプログラム (鑑賞支援・職場体験・盲学校対応)
 - ・教員研修 (全国高等学校美術工芸教育研究会のための研修会ほか)
- 大学との連携
 - ・キャンパスメンバーズ制度、インターンシップ学生の受入
- 学習機会の提供
 - ・講演会、ギャラリートーク、ワークショップ、展示関連イベント
- 教育普及的展示
 - ・親と子のギャラリー
- ボランティア活動
 - ・各種教育事業およびイベント等の補助、館内案内等の実施
 - ・各種ガイドツアー等の実施
 - ・バリアフリー対応の実施



スクールプログラム「レクチャールームでのプログラム はじめての東博」実施風景



当館生涯学習ボランティアによる触知図を使った館内案内活動風景

■調査研究

日本を中心に広く東洋諸地域にわたる文化財について計画的な調査研究を実施し、文化財の収集・保管・展示活動に反映しています。調査研究には科学研究費補助金や文化活動の助成金も活用しています。

平成26年度の研究テーマの一部を紹介します。

- ・板谷家を中心とした幕府御用絵師に関する総合的研究
- ・博物館における文化財の情報資源化に関する研究
- ・法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究
- ・特別調査 「書跡」「工芸」



特別調査「書跡」

沿革

明治5年(1872)	旧湯島聖堂の大成殿で開催された日本初の博覧会を機に、「文部省博物館」として発足
明治8年(1875)	内務省所管となる。陳列区分は天産、農業山林、工芸器械、芸術、史伝、教育、法教、陸海軍部の8部門
明治15年(1882)	上野寛永寺本坊跡の現在地に移転
明治22年(1889)	宮内省所管の「帝国博物館」となる
明治33年(1900)	「東京帝室博物館」と改称
明治42年(1909)	表慶館が開館
大正12年(1923)	関東大震災により、旧本館が損壊
大正14年(1925)	天産部の列品を文部省の東京博物館(現在の国立科学博物館)などに移管
昭和13年(1938)	現在の本館が開館
昭和22年(1947)	文部省に移管「国立博物館」と改称
昭和27年(1952)	「東京国立博物館」と改称
昭和39年(1964)	法隆寺宝物館(旧館)が開館
昭和43年(1968)	文化庁の附属機関となる 東洋館が開館
平成11年(1999)	法隆寺宝物館が開館、つづいて平成館が開館
平成13年(2001)	独立行政法人国立博物館 東京国立博物館となる
平成19年(2007)	独立行政法人国立文化財機構 東京国立博物館となる

施設概要

施設概要 (m ²)				
土地面積	120,270 (黒田記念館、柳瀬荘含む)			
建 物	建築面積	22,398	延 面 積	72,192
展 示 館	展示面積 計	18,199		
	収蔵庫面積 計	7,836		
本 館	建築面積	6,602	延 面 積	22,416
	展示面積	6,573	収蔵庫面積	4,028
東 洋 館	建築面積	2,892	延 面 積	12,531
	展示面積	4,250	収蔵庫面積	1,373
平 成 館	建築面積	5,529	延 面 積	19,393
	展示面積	4,471	収蔵庫面積	2,119
法隆寺宝物館	建築面積	1,935	延 面 積	4,031
	展示面積	1,462	収蔵庫面積	291
表 慶 館	※基本的に休館 建築面積	1,130	延 面 積	2,077
	展示面積	1,179	収蔵庫面積	0
黒田記念館	※平成24年4月8日より休館中 建築面積	724	延 面 積	1,996
	展示面積	264	収蔵庫面積	25
そ の 他	建築面積	3,586	延 面 積	9,748

京都国立博物館

京都に都が置かれた平安時代から江戸時代の京都文化を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。



京都国立博物館長
佐々木 丞平

京都は平安遷都以降、明治維新に至るまで、天皇を頂く皇都であり続けました。この1000年に余る永きにわたり栄えた都としての文化は文字通り日本文化の本流そのものでもありました。京都国立博物館はこの京路の伝統文化の証としての様々な文化財を中心とし、日本の伝統文化を世界に発信すべく活動を続けてまいりました。今後も「日本の伝統文化を世界へ」を大きな目標とし続けていきたいと思ひます。そのためにはあらゆる人々に関心を持って頂き、博物館に足を運んで頂かなければなりません。私共は「人に優しい博物館」を目指します。教育の場であったり、癒しの空間であったり、生涯学習の場であったり、更には国内外からの観光の起点でもありたいと思ひます。

この度、平常展示館として「平成知新館」がリニューアルいたしました。9月のグランドオープンを機に、明治30年に創建された本館と共に、この新しい設備と機能を備えた新館を最大限に活用して、皆様に愛される京都国立博物館を目指したいと思ひます。

■ 展示・公開

● 平常展

平常展示館は「平成知新館」として平成26年9月13日にグランドオープンします。

● 特別展等

特別展示館「明治古都館」で開催します。

- ・「特別展覧会 南山城の古寺巡礼」（平成26年4月22日～6月15日）
- ・「修理完成記念 国宝鳥獣戯画と高台寺」（平成26年10月7日～11月24日）



平成知新館



特別展覧会
「狩野山楽・山雪」
(平成25年3月30日～5月12日)



特別展覧
「遊び」
(平成25年7月13日～8月25日)



特別展覧会
「魅惑の清朝陶磁」
(平成25年10月12日～12月15日)

■ 文化財の収集・保管・修理

京都国立博物館では設立以来、社寺に伝来してきた名宝の寄託を多数受けています。また、京都文化に関する美術・考古資料をはじめとする文化財の購入及び寄贈によって、収蔵品は年々増加しています。

こうした文化財を後世に伝えるためには、適切な修理や保存処置を施す必要があります。昭和55年には日本で最初の総合的文化財修理専用施設として、文化財保存修理所が業務を開始しました。



文化財保存修理所

■ 教育普及

展覧会および展示作品への理解を深め、文化財への関心を高めるために、展覧会・ホームページ・教育現場などを通じてさまざまな事業を行っています。

○展覧会内容および展示作品の理解を深めるための活動

- ・「土曜講座」「記念講演会」などの講演会、小中学生を対象としたギャラリー・ツアー（少年少女博物館くらぶ）、の開催、小中学生向けワークシートや作品解説シート（博物館ディクショナリー）の配布

○文化財への関心を高めるための活動・夏期講座・シンポジウムなどの講演会、高精細デジタル複製美術品を用いた文化財ソムリエによる京都市内小中学校への訪問授業（文化財に親しむ授業）、ワークショップの開催

○教育機関との連携・協力活動

・キャンパス・メンバーズ制度、京都大学大学院人間・環境学研究科の歴史文化社会論講座担当、文化財ソムリエ（京都国立博物館 文化財に親しむ授業講師）の育成



少年少女博物館くらぶ
「びじゅつで遊ぼう！」
(平成25年8月6日、9日)



文化財ソムリエによる
「文化財に親しむ授業」
(平成25年11月11日)

■調査研究

当館では学芸部研究員を中心に京都市とその周辺に所在する古社寺の文化財悉皆調査を昭和54年度から継続して実施しています。平成25年度には科学研究費による「南山城地域の歴史と仏教文化に関する総合的研究」の一環として宇治田原町の禅定寺、京田辺市の寿宝寺、酬恩庵に行き、伝来の仏教や美術作品の調査を行いました。その成果は報告書と特別展覧会「南山城の古寺巡礼」(平成26年4月～6月) 開催という形で公開する予定です。

さらに科学研究費補助金によるものとして学芸研究員による様々な研究、例えば「京都蒔絵の歴史的研究」や「鎖国下の日本における清朝陶磁の需容に関する調査研究」、「中世一切経の資料的研究」などの研究を行っています。

学芸研究員による個別の研究成果の一部は研究紀要の『学叢』に掲載公表しています。



酬恩庵内調査風景



京都・らくご博物館



野外音楽会（音燈華）

■その他の活動

○京都・らくご博物館

親しまれる博物館づくりの一環として、わが国の伝統文化であり、京都が発祥の地である落語の上演を「京都・らくご博物館」と題して、年数回季節に応じた演目を上演します。このほか、音楽会の開催も予定しています。

沿革

明治22年(1889) 宮内省所管「帝国京都博物館」として設置
明治30年(1897) 開館
明治33年(1900) 「京都帝室博物館」と改称
大正13年(1924) 京都市に下賜し、「恩賜京都博物館」と改称
昭和27年(1952) 恩賜京都博物館を国に移管し、文化財保護委員会の附属機関として「国立博物館」と改称
昭和41年(1966) 平常展示館が開館
昭和43年(1968) 文化庁の附属機関となる
昭和44年(1969) 特別展示館、表門、同札売場、袖塀が「旧帝国京都博物館」として重要文化財に指定される
昭和48年(1973) 第1回土曜講座開講
昭和55年(1980) 文化財保存修理所業務開始
平成13年(2001) 百年記念館（仮称）新築事業の一環として南門が竣工
平成13年(2001) 独立行政法人国立博物館 京都国立博物館となる
平成19年(2007) 独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館となる
平成21年(2009) 新展示館「平成知新館」建替え工事を開始する
平成25年(2013) 「平成知新館」竣工（8月）
平成26年(2014) 「平成知新館」開館（9月）

施設概要

(m ²)			
土地面積			53,182
建 物	建築面積	延 面 積	31,828
展 示 館	展示面積 計		5,657
	収蔵庫面積 計		5,421
特別展示館	建築面積	延 面 積	3,015
	展示面積	収蔵庫面積	803
平常展示館	建築面積	延 面 積	17,997
	展示面積	収蔵庫面積	2,710
管 理 棟	建築面積	延 面 積	1,954
資 料 棟	建築面積	延 面 積	1,125
文化財保存修理所	建築面積	延 面 積	2,856
技術資料参考館	建築面積	延 面 積	304
東収蔵庫	建築面積	延 面 積	1,996
		収蔵庫面積	1,412
北収蔵庫	建築面積	延 面 積	682
		収蔵庫面積	496
そ の 他	建築面積	延 面 積	1,899



奈良国立博物館

仏教美術及び奈良を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。



奈良国立博物館長
湯山 賢一

奈良国立博物館は、明治28（1895）年の開館以来、南都諸社寺の御協力をいただきながら、仏教美術を中心とした文化財の収集・保管・調査研究や教育普及活動を行い、神と仏が融合した我が国の仏教文化のもつ優れた芸術性やその背景にある歴史について紹介してまいりました。今後は、こうした当館の特色を基盤に、様々な文化財と奈良のもつ歴史・文化的景観の有機的な連携を念頭に、新たな奈良文化の発信の拠点として、国際化や情報化への一層の充実に努め、広く国民の皆様にご覧いただける博物館を目指します。

■展示・公開

●仏教美術の展示

当館では、特別展や特別陳列以外にも、国宝・重要文化財を多数含む選りすぐりの仏教美術の名品を公開しています。なら仏像館では、名品展「珠玉の仏たち」と題し、主として飛鳥から鎌倉時代にいたる日本の彫刻史を代表する優れた仏像の数々を展示しています。また、西新館では、名品展「珠玉の仏教美術」と題し、絵画・工芸・書跡・考古の各ジャンルにわたる日本仏教美術の粋ともいふべき作品群をご覧いただけます。さらに、随時、ジャンルの枠にとらわれない特集展示なども開催しています。

●特別陳列

各分野で行う中規模のテーマ展示です。

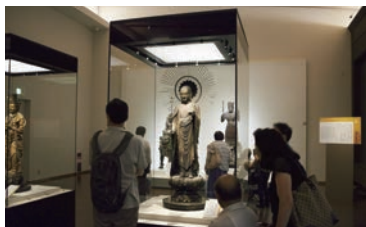
- ・おん祭と春日信仰の美術（平成26年12月9日～27年1月18日）
- ・お水取り（平成27年2月7日～3月15日）

●特別展

- ・武家のみやこ 鎌倉の仏像―迫真とエキゾチシズム―（平成26年4月5日～6月1日）
- ・醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念 国宝 醍醐寺のすべて―密教のほとけと聖教―（平成26年7月19日～9月15日）
- ・第66回正倉院展（平成26年10月下旬～11月上旬）（予定）



特別展「當麻曼荼羅完成1250年記念特別展 當麻寺―極楽浄土へのあこがれ―」
平成25年4月6日～6月2日



特別展「みほとけのかたち―仏像に会う―」
平成25年7月20日～9月16日



特別展「第65回正倉院展」
平成25年10月26日～11月11日

■文化財の収集・保管・修理

貴重な国民の財産である有形文化財を守るため、購入・寄贈・寄託により、有形文化財の収集に努力しています。

展示室や収蔵庫においては、常時適切な温湿度管理を実施し、収集した文化財の保存環境にも細心の注意を払っています。

また、我が国に伝わる文化財は紙、木など脆弱な材質のものが多く、これらを後世にいかんなく伝えるのが大きなテーマになっています。奈良国立博物館では平成14年に文化財保存修理所を設置、文化財の計画的修理を実施しています。



修理技術者による工芸品の修理

■教育普及

文化財に対する理解を深めるため、様々な教育普及活動に力を入れています。

- ①文化財に関する情報資料の収集と公開
- ②児童・生徒を対象とした事業
奈良市内小学5年生向け世界遺産学習、教員向け講座
- ③講演会・講座等の実施公開講座、サンデートーク、夏季講座、正倉院学術シンポジウム、国際研究集会
- ④大学等との連携キャンパスメンバーズ制度、インターンシップ学生の受入れ、放送大学の面接授業、奈良女子大学及び神戸大学との連携講座
- ⑤ボランティア活動の充実



ボランティアによる博物館内の庭園散策ツアー案内



正倉院学術シンポジウム



調査研究



文化財の撮影

■調査研究・国際交流

文化財に関する調査研究は、研究機関である奈良国立博物館の根幹を支える最も重要な活動です。その成果は名品展や特別展に反映され、展示活動の充実にもつながっています。当館では、平成26年度も以下のテーマで調査研究を行い、着実な成果をあげてまいります。

- ①収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究
- ②復元模写制作に伴う仏教絵画の光学的調査研究
- ③平安時代の大般若経の総合的調査
- ④仏教工芸の総合的調査
- ⑤古墳・古墓出土品の調査研究
- ⑥特別展等の開催に伴う調査研究
- ⑦南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究
- ⑧東京文化財研究所と共同で実施する仏教美術の光学的調査研究
- ⑨収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境の、文化財に与える影響などに関する調査研究
- ⑩文化財修理の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究
- ⑪保存科学の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究
- ⑫歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究
- ⑬文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究

沿革

明治22年(1889)	宮内省所管の「帝国奈良博物館」として設置
明治28年(1895)	開館
明治33年(1900)	奈良帝室博物館と改称
大正3年(1914)	正倉院掛が置かれる
昭和22年(1947)	宮内省より文部省に移管される
昭和25年(1950)	文化財保護委員会附属機関となる
昭和27年(1952)	奈良国立博物館と改称
昭和43年(1968)	文化庁の附属機関となる
昭和47年(1972)	陳列館新館（西新館）竣工
昭和55年(1980)	仏教美術資料研究センター設置
平成7年(1995)	開館百周年記念式典挙行
平成9年(1997)	東新館、地下回廊竣工
平成12年(2000)	文化財保存修理所竣工
平成13年(2001)	独立行政法人国立博物館 奈良国立博物館となる
平成19年(2007)	独立行政法人国立文化財機構 奈良国立博物館となる

施設概要

(m ²)			
土地面積			78,760
建 物	建築面積	延 面 積	19,116
展 示 館	展示面積 計		4,079
	収蔵庫面積 計		1,558
なら仏像館	建築面積	1,512	延 面 積
	展示面積	1,261	1,512
青銅器館	建築面積	341	延 面 積
	展示面積	470	664
東 新 館	建築面積	1,825	延 面 積
	展示面積	875	収蔵庫面積
			1,394
西 新 館	建築面積	1,649	延 面 積
	展示面積	1,473	5,396
仏教美術資料研究センター	建築面積	718	延 面 積
			718
文化財保存修理所	建築面積	319	延 面 積
			1,036
地下回廊	延 面 積	2,152	収蔵庫面積
			164
そ の 他	建築面積	405	延 面 積
			1,249

日本とアジア諸地域との文化交流を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っています。



九州国立博物館長
三輪 嘉六

九州は日本列島の西端に位置していますが、大陸に近いことから、古来より人とモノの行き来が盛んに行われてきました。この地には古代に外国使節も受け入れた大宰府政府が置かれています。そうした歴史的背景や九州の人々の熱望を踏まえて、平成17年に、日本文化の形成をアジア諸地域との関わりで捉えることをコンセプトにした国立博物館が、この福岡県太宰府市に誕生し、来年には10年目を迎えることとなっております。

当館は、これまでに1,000万人を超える多くの来館者をお迎えしています。近年は中国や韓国からのお客様が多いのも特色のひとつです。これからも、アジアの文化の相互理解を深める博物館となるために、さまざまな調査研究や活動を展開し、地域の方々にも開かれた「生きている博物館」として歩み続けていきたいと思っています。

■展示・公開

●文化交流展（平常展）

文化交流展示室では、展示テーマを決めて期間限定で行うトピック展示を開催し、いつでも新しい展示品に出会える場としての感動を皆様にお届けしています。更に、映像や実際に触れることができる展示により迫力だけでなく臨場感に溢れる展示を推進しています。

●トピック展示（特集陳列）

平成26年度実施予定の主なトピック展示は次のとおりです。

- ・「館蔵近世絵画名品展」（前期：平成26年2月25日～4月6日、後期：4月8日～5月18日）
- ・「中国を旅した禅僧の足跡」（平成26年5月27日～7月6日）
- ・「全国高等学校 考古名品展」（平成26年7月15日～9月23日）
- ・「大涅槃展」（平成27年1月14日～2月15日）
- ・「柿右衛門—受け継がれる技と美—（仮称）」（平成27年3月3日～5月10日）

●特別展

特別展は、いろいろなテーマをいろいろな切り口でご紹介するもので、初めての方でも楽しめる、よく知っている方も楽しめる、そんな展覧会を目指して企画・展示を行っています。平成26年度実施予定の特別展は次のとおりです。

- ・「藤原道長『御堂関白記』ユネスコ世界記憶遺産登録記念 華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝—京都・陽明文庫展」（平成26年4月15日～6月8日）
- ・「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美」（平成26年7月8日～8月31日）
- ・「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」（平成26年10月7日～11月30日）
- ・「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶余—（同時開催 発掘された日本列島2014）」（平成27年1月1日～3月1日）

■文化財の収集・保管・修理

●収集

日本とアジア諸国との文化交流のありさまをより分かりやすく示すための資料（美術・考古・歴史及び民族資料等）を重点的に収集しています。また、展示の一層の充実を図るために、積極的に諸機関・社寺・個人に対し、出品・寄託を働きかけていきます。

●保管

貴重な文化財を保存・管理する「収蔵庫」は、直接外部と接しないように空気層を設けた二重構造の箱内に設置するとともに、建物の中心に配置しています。また、空調設備は恒温恒湿仕様の空調機を採用することにより、庫内温湿度を維持しています。さらに、内装材料は地元九州各地から調達した杉板と調湿材を壁や天井に使用することにより、空調のみに頼らない湿度環境を保っています。

当館は地震時の文化財の転倒などによる破損を防ぐために「免震構造」となっています。免震建築物の特徴として、地面上に免震装置を設置することにより、地震が起きた際に、その上にある建物への地震の揺れが直に伝わるのを防ぎ、ゆっくり揺れるようになる結果、文化財を地震から守ることができます。

●修理

6つの文化財保存修復施設（補修紙制作等、古文書・書跡・典籍、絵画、彫刻、考古、漆工）では、博物館科学課と連携して、伝統的技術と人文科学および科学技術を融合した保存修理を実施しています。

実際に修理を行っているのは、国指定文化財の修理実績がある技術者で、歴史、美術、工芸、考古などの各専門分野の研究者と、それぞれの専門的立場から意見を出し合いながら保存修理を進めています。また、最先端の成分分析装置や精密計測技術（蛍光X線分析装置・X線CT装置等）によって、修理対象文化財の科学的調査にも取り組んでいます。



文化交流展（平常展）



トピック展「江戸のサイエンス—
—武雄蘭学の軌跡—」
平成25年4月16日～7月7日



特別展「大ベトナム展」
平成25年4月16日～6月9日

■教育普及・交流活動

●教育普及活動

①体験型展示室「あじっば」での活動

「あじっば」とは日本と歴史的に交流のあった諸地域の生活文化を比較体験する体験型展示室で、教育キットの開発や教育機関と連携したプログラムの開発及び一般来館者が博物館の諸活動を体験できるプログラムの開発等を行っています。



ボランティア活動：九博子どもフェスタ

②特別展・文化交流展関連プログラム等の開発・実施

- ・展示理解プログラムの開発・実施
- ・ワークショップの実施
- ・ガイドブックの制作

③学校用教育キット「きゅうぱっく」の貸出

④大学等との連携を強めるキャンパスメンバーズ制度の実施

⑤「きゅうはく」の絵本を通じた教育普及活動

⑥ボランティア活動の支援 展示解説・教育普及・館内案内（バックヤードツアーを含む）・環境・イベント活動・資料整理などのボランティア活動を支援しています。

●交流活動

①近隣地域をはじめ、企業等と連携した交流事業の実施や施設の有効活用を図るなど利用サービスの向上に努めています。

②アジアを中心とした博物館交流の推進

・韓国の国立扶余博物館・国立公州博物館・国立韓国伝統文化大学校、中国の南京博物院・内蒙古博物院・中国文物交流中心、ベトナムのベトナム国立歴史博物館、タイのタイ文化省芸術局と学術文化協定を締結し、相互交流を推進しています。

③国際シンポジウムの開催

・「ベトナムに恋して」（平成25年10月5日）



調査研究

■調査研究

当館のメインテーマである「日本とアジア諸国との文化交流」に関する調査研究や文化財の保存・修復のための科学的調査研究を実施することにより、その研究成果を文化財の収集・保管・展示に反映させています。また、これらの研究には(独)日本学術振興会による科学研究費助成事業等も活用しています。

- ・X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析
- ・水中遺跡の保存・活用に関する調査研究
- ・日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究
- ・博物館危機管理としての市民協同型IPMシステム構築に向けての基礎研究

■刊行物

当館の活動を広く理解してもらうために様々な刊行物を出版しています。

i) 研究紀要「東風西声」

—九州国立博物館の調査研究成果を冊子にしたもの（年1回発行）

ii) 文化交流展示ビジュアルガイドブック「Asiage（アジアージュ）」

—文化交流展示（平常展示）を分かりやすく紹介したガイドブック

iii) 季刊情報誌「アジアージュ」

—各特別展・文化交流展の紹介を中心とした広報誌（年4回発行）

iv) 「きゅうはく」の絵本

子どもたちに日本の歴史・文化を分かりやすく、親しみをもって理解してもらうために当館独自の絵本を制作しています。

沿革

平成6年(1994) 文化庁が「新構想博物館の整備に関する調査研究委員会」(以下「委員会」という。)を設置
平成8年(1996) 文化庁が新構想博物館を「九州国立博物館(仮称)」とし、その設置候補地を福岡県太宰府市に決定
平成9年(1997) 委員会が『九州国立博物館(仮称)基本構想』を取りまとめ
平成11年(1999) 委員会が『九州国立博物館(仮称)基本計画』を策定
平成12年(2000) 文化庁、福岡県及び財団法人九州国立博物館設置促進財団(以下「財団」という。)が共同で『建築基本設計』を完了
文化庁と福岡県が共同で設置した「九州国立博物館(仮称)設立準備専門委員会」が「常設展示計画」を策定
平成13年(2001) 文化庁、福岡県及び財団が共同で『展示基本設計』を完了
独立行政法人国立博物館(以下「国立博物館」という。)が「九州国立博物館設立準備室」を設置
平成14年(2002) 文化庁、福岡県及び財団が共同で『建設工事(3年計画の第一年度)』に着手
平成15年(2003) 国立博物館及び福岡県が『展示工事(2年計画の第一年度)』に着手
平成16年(2004) 文化庁、福岡県及び財団が『建設工事』を完了(建物が完成)
文化庁、国立博物館及び福岡県が正式名称を「九州国立博物館」と発表

平成17年(2005) 国立博物館及び福岡県が『展示工事(2年計画の第二年度)』を完了
国立博物館が九州国立博物館を設置
10月16日 一般公開開始
平成19年(2007) 独立行政法人国立文化財機構 九州国立博物館となる
平成20年(2008) 九州国立博物館で日中韓首脳会議を開催
平成24年(2012) 来館者1,000万人達成

施設概要

		(m ²)	
土地面積	法人	10,798	166,477
	県		155,679
建 物	建築面積	14,623	
	延 面 積	30,675	
展示・収蔵面積	法人	9,300	15,595
	県	5,780	共用 15,595
展示・収蔵面積	展示面積 計	5,444	
	法人	3,844	県 1,375 共用 225
展示・収蔵面積	収蔵庫面積 計	4,518	
	法人	2,744	県 1,335 共用 439

※土地・建物は福岡県と法人が共有しています。



東京文化財研究所



東京文化財研究所長
亀井 伸雄

東京文化財研究所は、国の文化財行政を支える役割を担っており、多様な文化財の全般にわたり、基礎的・体系的・先端的・実践的な調査研究を進めています。そして、得られた成果等を積極的に公表するとともに、地方公共団体等への指導・助言を行い、さらには、近隣諸国からの要請に応じて文化財の保存・修復に関する国際貢献事業を実施しています。

そのなかで、当面の重点課題として、当研究所に蓄積されている調査研究成果や基礎資料等文化財全般に関するアーカイブ構築、保存修復分野では、博物館資料の保存・修復・公開等に関する調査研究も視野に入れた文化財機構全体としての一体的な事業の推進、さらに、無形文化財の分野では、民俗芸能や民俗技術を中心に基礎資料の収集と公開、これら3点に力点を置いて調査研究を行っています。

このほか、国際協力の面で国として一体的・効果的な事業を推進するための連携組織である「文化遺産国際協力コンソーシアム」の事務局が当研究所内に置かれており、海外の遺跡・建造物等の有形文化財（文化遺産）の保存修復協力のさらなる促進を目指して活動しています。

■研究組織

●企画情報部

企画情報部は、研究所全体の情報システムの管理や広報活動に取り組むとともに、文化財研究のためのアーカイブの拡充を図るため、文化財に関する資料の収集・蓄積・整理・公開、そして効果的な情報発信を進めています。同時に、美術史研究の今日的な課題にも取り組み、新しい資料学の確立を目指しています。



當麻寺裏板曼荼羅の調査撮影

●無形文化遺産部

無形文化遺産部は、無形文化財、無形民俗文化財及び文化財保存技術という日本の無形文化遺産全般を対象として、その保存継承に役立つような基礎的な調査研究を実施しています。また無形文化遺産の重要な保護手法である音声・映像による記録については、その作成の実施とともに新たな手法開発についての研究を行っています。



林家正雀師による正本芝居噺の実演風景

●保存修復科学センター

保存修復科学センターは、文化財の保存のために、それを取りまく保存環境や科学的な調査手法の研究を、また文化財の修復のために、その性質、製作技法と置かれた環境の調査、必要な修復材料・技法の改良と開発評価およびメンテナンス手法の開発を行っています。

これらの調査研究は文化財の所蔵者や保存修復現場の方々と密接に協力しながら進めています。



ハンドヘルド蛍光X線分析装置を用いた金属文化財のその場分析

●文化遺産国際協力センター

文化遺産国際協力センターは、アフガニスタンやアジア諸国での人材養成・技術移転を含む保存修復事業への協力、研究会の開催などによる国内外の機関との連携の推進、文化財や保護制度に関する情報の収集・発信を行っています。

また文化遺産国際協力センターでは文化遺産国際協力コンソーシアム事務局を受託運営しています。



漆工芸品修復に関するワークショップ（ドイツ）

■ 研修・助言・指導

東京文化財研究所では文化財の保護とその活用を目指し、「国際研修 紙の保存と修復」「博物館・美術館等保存担当芸員研修」「無形文化遺産保護に対する助言・指導」「博物館・美術館等の環境調査と援助・助言」「文化財の修復及び整備に関する調査・助言」など、さまざまな研修・助言・指導を行っています。



国際研修「紙の保存と修復」



資料保存地域研修（山梨県）



第8回無形文化遺産部公開学術講座「昭和初期上方落語の口演記録」の案内

■ 大学院教育・公開講座

東京文化財研究所では次世代の人材育成や研究成果の社会的還元を目指し、大学院教育や公開講座を行っています。大学院教育は、平成7年より東京藝術大学と連携し、システム保存学コースを開設しています。また公開講座は、企画情報部と無形文化遺産部がそれぞれ毎年開催しています。

■ 情報発信

東京文化財研究所では調査研究、国際協力など、さまざまな活動の成果を積極的に発信・公開する取り組みを進めています。また『年報』『概要』『東文研ニュース』などの広報誌を刊行するとともに、ホームページの充実に努めています。



東京文化財研究所蔵ガラス乾板データベース (<http://www.tobunken.go.jp/materials/glass>)

■ 刊行物

東京文化財研究所では定期刊行物として『美術研究』『日本美術年鑑』『無形文化遺産研究報告』『保存科学』を刊行しています。そのほか、さまざまな研究成果を一般の方にも入手しやすい刊行物の形として公表しています。



日本美術年鑑



第8回無形民俗文化財研究協議会報告書『わがを伝える—伝統とその活用—』



保存科学

沿革

昭和5年(1930) 帝国美術院に附属美術研究所が設置される
昭和22年(1947) 国立博物館附属美術研究所となる
昭和25年(1950) 文化財保護委員会の附属機関となる
昭和27年(1952) 美術研究所は東京文化財研究所となる
昭和29年(1954) 東京文化財研究所は東京国立文化財研究所となる
昭和43年(1968) 文化庁の附属機関となる
平成12年(2000) 新営庁舎（新館）竣工・移転
平成13年(2001) 独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所となる
平成19年(2007) 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所となる

施設概要

		(m ²)
土地面積		4,181
建 物	建築面積	2,258
	延 面 積	10,516



奈良文化財研究所



奈良文化財研究所長
松村 恵司

奈良文化財研究所は、貴重な文化財を実物に即して総合的に研究する組織で、平城宮跡や藤原宮跡の発掘調査をはじめ、建造物、古文書などの個々の文化財の調査研究、そして飛鳥保存のための調査研究と展示普及などを行っています。これらは、国内外の文化財研究、学術交流、国際支援にも大きく寄与し、中国や韓国の文化財研究所との恒常的な共同研究としても結実しています。また、新たな発掘技術と研究方法の開発、地方公共団体専門職員への指導と研修なども行っています。

遺跡の保護のために研究所が開発した保存、修復、整備の技術は、全国各地はもちろん世界の遺跡でも活かされています。これらの調査研究は、当研究所の特徴である異なった分野の学際的な共同研究によって支えられています。当研究所は、それらを最大限に活かし、文化財保存のための研究を一層充実してまいり所存です。

●企画調整部

企画調整部は、企画調整室、文化財情報研究室、国際遺跡研究室、展示企画室、写真室で構成されています。各研究室は、地方公共団体文化財担当職員等を対象とした専門研修の企画、情報システムの整備と各種データベースの公開、遺跡等に関する国際的な共同研究や協力、平城宮跡資料館等での研究成果の公開普及、写真の作成と新技術の開発などの業務を担っています。

●文化遺産部

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室を置き、それぞれが、「書跡・典籍・古文書・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡整備・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究を行っています。各研究室における多様な調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策など、国の文化財保護行政に大きく寄与するものとなっています。また、地方公共団体の文化財行政に対しても、協力・助言等で貢献しています。

●都城発掘調査部

都城発掘調査部は考古第一・第二・第三、史料、遺構の5研究室で構成され、平城地区と飛鳥・藤原地区に所在する古代宮殿や寺院、墳墓などで行う発掘調査に基づいて、学際的な調査研究を推進しています。その成果については説明会や報告書、展示などで公開するとともに、遺跡の保存・活用に資する研究にも取り組んでいます。

【平城地区】

奈良時代（710～784）に天皇の宮殿と中央官庁があった平城宮跡の発掘調査とそれに基づく研究を主に担当しています。昭和34年（1959）から計画的な調査を継続し、これまでに130haに及ぶ平城宮跡の3分の1以上の発掘を進めてきました。平城宮跡や寺院の遺跡等で発掘された建物等の遺構ならびに木簡や木製品・土器・瓦等の遺物をもとに、文献とも照合した実証的な奈良時代研究は、高く評価されています。また、平城宮跡を国営公園として整備している国土交通省に対し、整備の基礎資料となる平城宮跡の研究成果を提供しています。

【飛鳥・藤原地区】

わが国の古代国家成立期である7世紀から8世紀初頭にかけて、政治・経済・文化の中心地であった飛鳥・藤原地域の発掘調査とそれに基づく研究を担当しています。飛鳥地域には、宮殿や豪族の居館、飛鳥寺等の寺院のほか、銭貨や硝子などの工芸品を製作した総合工房や漏刻（水時計）台、墳墓などの遺跡があり、その北方には、わが国最初の本格的都城である藤原京が方5km以上の範囲に広がっています。飛鳥・藤原地域の遺跡の発掘調査に基づく実証的・学際的な研究は、飛鳥時代の歴史の解明に大きく貢献しています。



平城宮跡資料館夏期企画展



法隆寺金堂の古材調査



第一次大極殿院の発掘調査



藤原宮朝堂院朝庭の発掘調査

●埋蔵文化財センター

4室で構成される埋蔵文化財センターでは、各室が以下の研究を実施しています。保存修復科学研究室では、考古資料の材質や構造を解明して適切な保存修復等を行うため、分析法の開発と実用化に向けた研究を行っています。環境考古学研究室では、動植物遺存体による古環境の復元的研究を行っています。年代学研究室では、年輪年代学に関する基礎的研究を進めるとともに、その成果を考古学、建築史学等へ応用しています。遺跡・調査技術研究室では、遺跡の調査技術や計測・探査技術の研究・開発に加え、災害考古学の研究にも取り組んでいます。

●飛鳥資料館

飛鳥資料館は、飛鳥の歴史を紹介するための展示施設として、昭和50年（1975）に開館しました。常設展示として宮都・石造物・古墳・寺院などのテーマ毎に出土品などを展示するとともに、保存処理を行った山田寺東回廊の出土部材を復元展示しています。年に2回、春と秋に開催している特別展では、飛鳥の歴史や出土文化財に焦点を当てた展示を行い、また夏と冬には、奈良文化財研究所の多様な研究成果をわかりやすく伝える企画展を開催しています。

●国際学術交流

奈良文化財研究所で現在実施している国際交流・協力事業は、学術共同研究、研究員交流、技術研修、保存修復などであり、ユネスコ・アジア太平洋文化センター（ACCU）など他機関が行う国際協力事業にも協力しています。

独自事業としては、①中国社会科学院との漢魏洛陽城等の都城遺跡の共同調査、②中国河南省文物考古研究院との鞏義市黄冶・白河窯跡の共同調査、③中国遼寧省文物考古研究所との三燕時代の各種遺跡の共同調査、④韓国国立文化財研究所との都城の比較研究ならび発掘調査人材交流、⑤カンボジア・アンコール・シェムリアップ地域文化財保護管理機構（APSARA）と連携したアンコール遺跡群西トップ遺跡の研究調査・保存事業と人材育成、⑥米国コロンビア大学との研究交流、を行っています。また、文化庁から受託した拠点交流事業として、ベトナム林業大学と共同で出土材料に関する研究もを行っています。

上記に加え、東京文化財研究所が受託しているミャンマーに対する拠点交流事業のうち、考古学に関する技術移転・人材育成事業を担っています。さらに、アフガニスタン・バーミヤーン遺跡群の保存事業・人材育成、中央アジア諸国におけるシルクロード世界遺産登録支援事業でも東京文化財研究所に協力しています。



東大寺西塔におけるアレイ式GPRによる探査試験



飛鳥資料館



アンコール西トップ遺跡保存事業

沿革

昭和27年(1952)	文化財保護委員会の附属機関として奈良文化財研究所（庶務室・美術工芸研究室・建造物研究室・歴史研究室）を奈良市春日野町50に設置
昭和29年(1954)	奈良国立文化財研究所と改称
昭和35年(1960)	奈良市佐紀東町の平城宮跡に発掘調査事務所を設置
昭和38年(1963)	平城宮跡発掘調査部を設置
昭和43年(1968)	文化庁が発足 その附属機関となる
昭和45年(1970)	平城宮跡資料館を開館
昭和48年(1973)	会計課・飛鳥藤原宮跡発掘調査部・飛鳥資料館（準備室）を設置
昭和49年(1974)	庶務部（庶務課・会計課）と埋蔵文化財センターを設置
昭和50年(1975)	奈良県高市郡明日香村奥山601に飛鳥資料館を開館
昭和55年(1980)	美術工芸研究室を奈良国立博物館の仏教美術資料研究センターに移管
昭和55年(1980)	庁舎を奈良市二条町2-9-1に移転。平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センターを庁舎に移転統合
昭和63年(1988)	飛鳥藤原宮跡発掘調査部庁舎を橿原市木之本町94-1に新営
平成13年(2001)	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所となる
平成19年(2007)	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所となる
平成25年(2013)	本庁舎地区再開発計画に伴い、奈良市佐紀町247-1の仮設庁舎に移転

施設概要

	土 地	建 物	(m ²)
本館地区	8,860	建築面積 延 面 積	現在、建替中
平城宮跡資料館地区	(文化庁所属の国有地を無償使用)	建築面積 延 面 積	13,328 21,395
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	20,515	建築面積 延 面 積	6,016 9,477
飛鳥資料館地区	17,093	建築面積 延 面 積	2,657 4,404

アジア太平洋無形文化遺産研究センター



アジア太平洋無形文化
遺産研究センター所長
荒田 明夫

当センターは、平成21年10月の国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）総会にて「ユネスコが賛助するアジア太平洋地域における無形文化遺産のための国際協力センターの設置承認」を受け、翌年8月に締結された日本政府とユネスコ間の協定に基づき、平成23年10月に堺市に開所しました。

当センターは、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に向けた調査研究に従事する研究者や研究機関を支援し、当該分野における研究の充実を使命とする国際拠点（ユネスコカテゴリー2センター）です。現在、世界各地で様々な理由により危機に瀕している無形文化遺産が少なくありません。次の世代を担う子供たちが、代々継承されてきた豊かな文化を享受することができるよう、無形文化遺産の保護を調査研究の観点から実施していきます。

(<http://www.irci.jp/>)

■平成25年度の活動内容

センターでは、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護のための調査研究拠点として、次のような行動計画に沿って調査研究を推進するとともに、国際的動向の情報収集や我が国の知見を活用した無形文化遺産保護の国際的充実につとめています。

1. アジア太平洋地域における無形文化遺産保護のための研究の把握と検討
2. アジア太平洋地域における危機に瀕する無形文化遺産の保護の実態や方法の調査研究
3. アジア太平洋におけるユネスコカテゴリー2センターとしての役割を踏まえた、堺市が実施する普及啓発活動などとの連携

上記行動方針に基づき、平成25年度は次のような活動を行いました。

●行動計画1（アジア太平洋地域における無形文化遺産保護のための研究の把握と検討）

1. 国際専門家会合「アジア太平洋地域における無形文化遺産の保護に関する調査研究の把握と検討」（タイ・バンコク、平成26年2月19日～20日）

アジア太平洋地域における無形文化遺産保護研究の現状と課題について、専門家を招いて討議を行いました。

●行動計画2（アジア太平洋地域における危機に瀕する無形文化遺産の保護の実態や方法の調査研究）

1. 紛争後の国家における危機に瀕する伝統的手工芸（スリランカ）
紛争終結地域における生活再建支援のために早急に保護が必要とされる無形文化遺産の特定を目的に、現地にて実態調査を行いました。
2. メコン圏における無形文化遺産に関する法制度研究（ラオス、カンボジア）
対象国における無形文化遺産の保護に向けた法的・政策的な枠組みを強化するために、無形文化遺産の保護に関する法制度の現状と問題点を調査しました。
3. ベトナム・ドンホー版画を事例とする危機に瀕する無形文化遺産のための保護措置の研究（ベトナム）
継承が危機的な状況に置かれているドンホー村の木版画について、コミュニティ主導の記録作成に向けた予備調査を行いました。
4. 無形文化遺産と博物館に関するフィールドスクール（タイ・スリン、平成25年8月6日～18日）
平成24年度に相互協力協定（MOU）を締結したタイ王国のシリントーン人類学センターと共催したフィールドスクールに講師を派遣しました。また、他の無形文化遺産に関する研究機関とも連携を引き続き進めています。
5. 東ティモール無形文化遺産専門家向けスタディーツアー（東京、秋田県男鹿市、茨城県結城市、栃木県益子町、平成25年10月22日～26日）
東ティモールの行政官など無形文化遺産の専門家を対象としたスタディーツアーを、ユネスコジャカルタ事務所と共同実施しました。
6. 無形文化遺産の記録と活用に関するワークショップ（東京国立博物館、平成26年2月4日～6日）
無形文化遺産の継承者やセンターの他の事業に参加した行政官などを招いて、ワークショップを開催しました。

●行動計画3（堺市が実施する普及啓発活動などとの連携）

1. 「無形文化遺産保護条約採択10周年記念シンポジウム」（ホテルアゴーラリージェンシー堺、平成25年8月3日）
無形文化遺産条約の採択から10周年を記念するシンポジウムを、文化庁及び堺市と共催しました。

平成26年度も上記行動計画と各研究テーマに基づき調査研究を進めていく予定です。



伝統的手工芸の調査（スリランカ）
©Centre for Eco-Cultural Studies,
Sri Lanka



国際専門家会合（タイ）



「無形文化遺産条約採択10周年記念シン
ポジウム」（大阪府堺市）



「東ティモール無形文化遺産専門家向けス
タディーツアー」（東京都・秋田・栃木・
茨城県）



「無形文化遺産の記録と活用に関するワー
クショップ」（東京都）

この他にも、センターでは開所以来、次のような事業を継続して行っています。

●堺市との協力

開設にあたって堺市と国立文化財機構との間で締結された協定により、センターは、アジア太平洋におけるセンターとしての役
割を踏まえ、堺市博物館を中心とした無形文化遺産に関する情報発信事業等、堺市が実施する事業との連携を図っています。

●情報発信

センターでは、その活動の成果を対象地域に広く公開するために、英語に加え、ベトナム語やタイ語などでウェブサイトの多言
語配信を行っています。

沿革		施設概要	
平成21年(2009)10月	センター設立がユネスコ総会で承認	(m ²)	
平成22年(2010)8月	センター設立に関する協定が日本政府とユネスコの間で締結	建 物	建築面積 244.67 延面積 244.67
平成23年(2011)3月	堺市と国立文化財機構との間でセンター開設に関する協定が締結	総室数	4 室
平成23年(2011)4月	アジア太平洋無形文化遺産研究センター設置準備室が設置	※建物は大阪府堺市から借用しています。	
平成23年(2011)10月	アジア太平洋無形文化遺産研究センター開所		

IV 資料

役員（平成26年7月1日現在）

理事長（京都国立博物館長）	佐々木 丞 平
理事（奈良文化財研究所長）	松 村 恵 司
理事	池 原 充 洋

理事

監 事
監 事

渡 邊 妙 子
雪 山 行 二
中 元 文 徳

運営委員会（平成26年4月1日現在）

国立文化財機構の運営について各界からご意見を伺うべく、外部有識者による運営委員会を設置しています。

運営委員会は、機構の管理運営に関する重要事項について審議を行うとともに理事長に助言することを任務としています。

委員は20名以内で、任期2年（再任可）。

阿 部 充 夫	東京国立博物館名誉館長	辻 惟 雄	東京大学名誉教授
安 藤 裕 康	独立行政法人国際交流基金理事長	辻 村 泰 善	公益財団法人元興寺文化財研究所理事長
石 澤 良 昭	上智大学アジア人材養成研究センター所長	中 島 史 子	フリーライター
今 村 肇 雄	国立歴史民俗博物館名誉教授	西 田 厚 聡	株式会社東芝取締役会長
風 岡 典 之	宮内庁長官	林 田 ス マ	公益財団法人大野城まどかびあ館長
神 居 文 彰	平等院住職	馬 淵 明 子	独立行政法人国立美術館理事長
佐 藤 宗 諄	奈良女子大学名誉教授	マリ・クリスティーヌ	異文化コミュニケーター
白 石 太一郎	大阪府立近つ飛鳥博物館長	冷 泉 為 人	公益財団法人冷泉家時雨亭文庫理事長
田 中 浩 二	九州旅客鉄道株式会社相談役		

（敬称略）

外部評価委員会（平成26年4月1日現在）

独立行政法人は、毎事業年度における、また、中期目標の期間における業務の実績について評価を受けることとなっています。このため、文部科学省に評価委員会が置かれていますが、国立文化財機構においても業務の実績について、自己点検評価を行うとともに、このことを検証し、適正な評価を行うために外部有識者による外部評価委員会を設置しています。

外部評価委員会は、機構の業務、調査・研究の実績についての評価を行い、理事長に助言することを任務としています。委員は任期2年（再任可）とし、適宜、評価にかかる会議・実地視察を行っています。

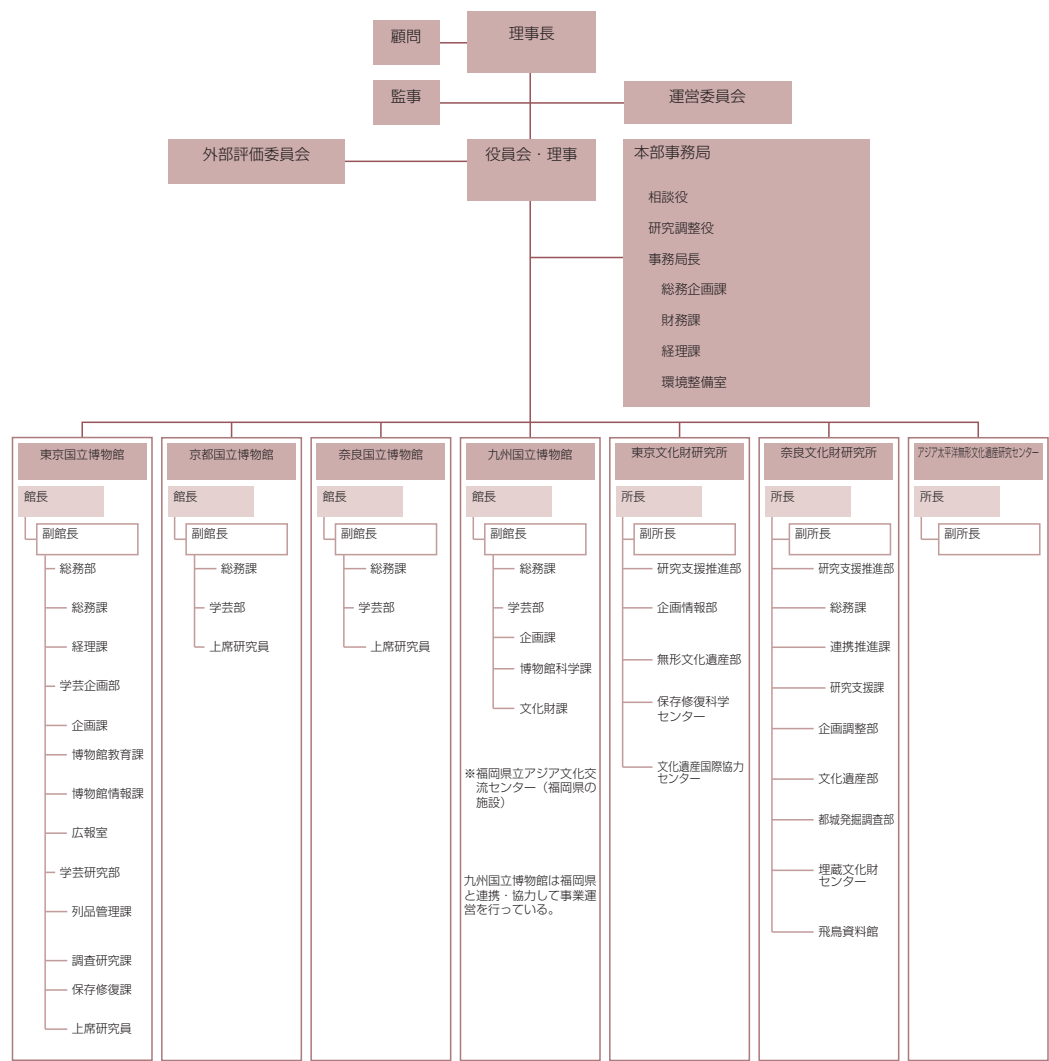
委員長	小 林 忠 一	学習院大学名誉教授・岡田美術館館長	佐 藤 信 子	東京大学大学院人文社会系研究科教授
副委員長	横 里 幸 一	NHKプロモーション取締役	園 田 直 子	国立民族学博物館文化資源研究センター教授
	鮎 川 眞 昭	公認会計士	玉 蟲 敏 子	武蔵野美術大学造形学部教授
	稲 田 孝 司	岡山大学名誉教授	浜 田 弘 明	桜美林大学教授
	岡 田 保 良	国土館大学イラク古代文化研究所教授	藤 田 治 彦	大阪大学大学院文学研究科教授
	河 合 正 朝	慶應義塾大学名誉教授・千葉市美術館館長	森 田 弘 子	福岡県文化財保護審議会専門委員
	酒 井 忠 康	世田谷美術館長	柳 林 修	読売新聞大阪本社記者

職員数

区 分	職員	一般職	技能・労務職	研究職
計	323	124	19	180
本部事務局	17	17	0	0
東京国立博物館	92	34	11	47
京都国立博物館	36	18	4	14
奈良国立博物館	33	15	4	14
九州国立博物館	27	10	0	17
東京文化財研究所	40	7	0	33
奈良文化財研究所	76	22	0	54
アジア太平洋無形文化遺産研究センター	2	1	0	1

（平成26年4月1日現在）

組織図



(平成26年4月1日現在)

予算

平成26年度予算

収入予算額

(単位：千円)

	平成26年度	平成25年度
自己収入	1,322,634	1,322,634
運営費交付金	8,238,870	8,391,705
受託収入	26,000	26,000
施設整備費補助金	2,990,365	2,853,965
合計	12,577,869	12,594,304

支出予算額

(単位：千円)

	平成26年度	平成25年度
運営事業費	9,561,504	9,714,339
人件費	3,100,606	2,781,812
物件費	6,460,898	6,932,527
受託事業費	26,000	26,000
施設整備費	2,990,365	2,853,965
合計	12,577,869	12,594,304

外部資金受入

施 設	科学研究費				受託研究費（25年度）		研究助成金（25年度）	
	①科学研究費補助金 （26年度）		②学術研究助成基金助成金 （26年度）					
	件数	金額（千円）	件数 （括弧は左の内数）	金額（千円）	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）
本部事務局	0	0	0（0）	0	0	0	0	0
東京国立博物館	16	47,440	18（10）	31,460	2	29,029	2	5,734
京都国立博物館	1	1,170	0（0）	0	0	0	1	1,943
奈良国立博物館	1	13,000	1（0）	910	0	0	5	10,500
九州国立博物館	5	22,620	8（4）	11,180	4	15,543	0	0
東京文化財研究所	7	18,200	25（5）	46,800	24	231,080	7	4,800
奈良文化財研究所	17	106,256	36（10）	45,890	39	286,324	9	7,090
アジア太平洋無形文化遺産研究センター	0	0	0（0）	0	2	56,015	1	9,933
計	47	208,686	88（29）	136,240	71	617,991	25	40,000

※①の金額は、当初の交付決定額の26年度分の金額です。
※①の金額は、複数年度の事業の場合、当初の交付決定時に各年度分の交付額が示される。
※②は、平成23年に新たに設置されました。
※同一の研究課題で①と②の両方が交付されるものの件数と金額はそれぞれに含み、②の件数の括弧書きは共通するものの内数である。
※受託研究費は機構内の委託を除きます。

国立文化財機構からのお知らせ

○寄附・寄贈

【寄 附】

独立行政法人は国から運営費交付金や施設整備費補助金を得て事業運営していますが、厳しい財政状況や効率化を図る観点から、広く外部資金を導入し経営に役立てることが求められています。国立文化財機構も例外ではなく、入場料以外にも収入の道を確保しなければなりません。このような趣旨から、個人・団体を問わず広く皆様にご支援をお願いしています。

国立文化財機構は、税法上の優遇措置の対象となる「特定公益増進法人」となっており、機構へ寄附を行う個人・団体は、当該寄附金について一般の法人に対する寄附金とは異なる所得税・法人税の優遇措置を受けることができます。

▶所得税

個人が特定公益増進法人等に寄附を行った場合には、一定額を所得税の課税所得から控除することが出来る「寄附金控除」の制度が設けられています。この「寄附金控除」については、平成22年度税制改正において、適用下限額が5千円から2千円に引き下げられました。これにより、特定公益増進法人等に対する寄附金の額が年間合計で2千円を超えれば減税の対象となりました。

⇒「寄附金（総所得金額等の40%を限度）－2千円」を所得から控除することができます。

▶法人税

法人が特定公益増進法人等に寄附を行った場合には、支出した特定公益増進法人等への寄附金額を、一般の寄附金とは別枠で損金に算入することができます。また、平成23年12月期税制改正では、さらに寄附金の優遇措置の拡充が図られ、寄附金の損金算入限度額が拡大されました。

⇒ 特別損金算入限度額＝「(資本金等の金額×0.375%（改正前0.25%）＋所得金額の6.25%（改正前5%）)×1/2」

【寄 贈】

国立文化財機構では、文化財を保存・管理、調査研究、展示などでの公開に活用しています。これらの事業を行うため文化財を計画的に購入するほか、文化財を所有される方からのご寄贈も頂いております。

ご寄附・ご寄贈に関するご相談や手続きについては、以下にお問い合わせください。

施設名	寄附	寄贈	お問い合わせ
東京国立博物館	総務部経理課	学芸研究部列品管理課	03-3822-1111（代表）
京都国立博物館	総務課財務係	学芸部列品管理室	075-541-1151（代表）
奈良国立博物館	総務課財務係	学芸部企画室	0742-22-7772(寄附・直通) 0742-22-7774(寄贈・直通)
九州国立博物館	総務課財務係	文化財課資料登録室	092-918-2807（代表）
東京文化財研究所	研究支援推進部管理室企画渉外係		03-3823-2249（直通）
奈良文化財研究所	研究支援推進部総務課		0742-30-6732（直通）
（施設を特定しない場合）	本部事務局財務課		03-3822-2439（直通）

○会員制度

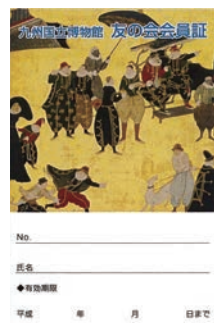
広くご支援を頂き運営基盤を確保するため、東京国立博物館・奈良国立博物館では賛助会員制度を設けているほか、京都国立博物館では一般社団法人清風会による支援を頂いております。

また、お客様により博物館に親しんでいただくために、友の会・パスポート制度を設けております。皆様のご利用をお待ちしております。

【キャンパスメンバーズ】

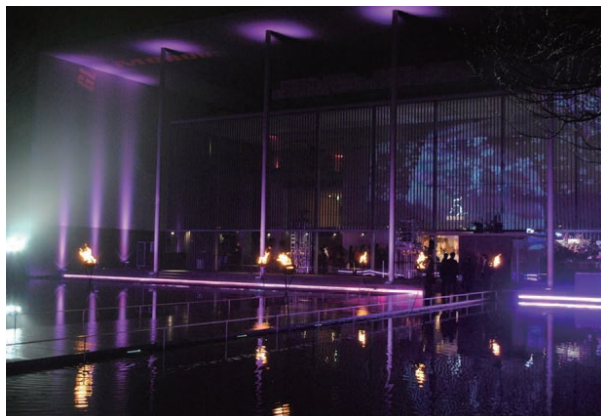
各国立博物館では、大学や専修学校等を対象としたキャンパスメンバーズ制度を設けております。本制度は大学等と博物館との連携を深め、学生の皆さんにより博物館に親しんでいただく機会を提供することを目的としています。

学生数に応じた年会費をお支払いいただくことにより、平常展を無料でご観覧いただけるなど各博物館で様々な特典をご用意しています。



○ユニークベニュー

各国立博物館では、施設をイベントの会場として活用するユニークベニューとしての施設利用を推進しております。企業のパーティーや野外映画上映会など、館内の施設をさまざまな用途にご利用いただいています。



東京国立博物館法隆寺宝物館におけるレセプションパーティー



東京国立博物館平成館におけるガラディナーパーティー



JR 上野駅公園口、または鶯谷駅下車 徒歩 10 分

東京メトロ 銀座線・日比谷線上野駅、

千代田線根津駅下車 徒歩 15 分

京成電鉄 京成上野駅下車 徒歩 15 分

独立行政法人

国立文化財機構

〒110-8712 東京都台東区上野公園 13 番 9 号

電話：03-3822-1196

URL：<http://www.nich.go.jp/>